吉村遺跡
中池遺跡
中萩遺跡
百町原地区遺跡
上南方地区遺跡
元野地区遺跡
古江地区遺跡
中尾・牛牧地区遺跡

平成３年度農業基盤整備事業
に伴う発掘調査概要報告書

平成４年３月

宮崎県教育委員会

吉村遺跡
中池遺跡
中萩遺跡
百町原地区遺跡
上南方地区遺跡
元野地区遺跡
古江地区遺跡
中尾・牛牧地区遺跡

平成３年度農業基盤整備事業
に伴う発掘調査概要報告書

平成４年３月

宮崎県教育委員会

序

日頃から埋蔵文化財の保護の保護・活用に対し、深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

宮崎県内各地では、農業の近代化を図るため各種の農業基盤整備事業が実施されています。本県は遺跡などの文化財が多数所在しますが、農業基盤整備事業実施予定地内にも遺跡が所在する場合が多々あり、文化財の保護と農業基盤整備事業との調査が１つの課題となっています。そこで県教育委員会では、農政部局との文化財保護についての協議資料として、事業実施予地内の分布調査や発掘調査を行い、遺跡の所在の有無、性格、範囲等の基礎資料を作成しています。

本年度は、平成３年度及び４年度の工事予定地の中で高崎町吉村遺跡、新富町祇園原地区遺跡、北郷町大塚遺跡、同町中萩遺跡、高城町中池遺跡、高鍋町中尾地区遺跡群、えびの市長江浦地区遺跡群など11か所で発掘調査を実施いたしました概要報告書です。これらの調査成果が文化財の保護に生かされ、また、さらに地域の歴史研究、社会教育の場等で役立てていただければ幸いに存じます。

最後に、調査にあたって御協力をいただいた地元の土地改良区並びに市町村教育委員会、各農林振興局などの関係諸機関の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成４年３月

宮崎県教育委員会

教育長　高 山 義 孝

例　言

1.　本書は、宮崎県教育委員会が平成３年度国庫の補助を得て実施した発掘調査の概要報告書である。
2.　発掘調査は、宮崎県内の農業基盤整備事業等に伴う遺跡の確認調査として実施した。
3.　遺跡の名称は、現在、遺跡として報告されていず、今回の分布調査・発掘調査等で確認された遺跡については、農業基盤整備事業の地区名を使用している。また、遺跡の推定範囲が広範囲で、その中に数か所の遺物散布地等がある場合には、○○遺跡群としている。今後、本調査等が実施された場合には、字名などを参考に各遺物散布地に遺跡名が命名される予定である。
4.　発掘調査は、県文化課主査面高哲郎、同北郷泰道、主任主事石川悦雄、主事長友郁子、高鍋町教育委員会山本格が担当した。
5.　本書で使用した図面等は、各現場担当者が作成したほか、一部については北郷町教育委員会時元省三氏の協力があった。
6.　本書の執筆は、各現場担当者が行った。
7.　出土した遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　平成３年度調査の概要…… 1
第Ⅱ章　発掘調査の概要…… 3
　第１節　吉村遺跡…… 3
　第２節　中池遺跡…… 6
　第３節　中萩遺跡…… 9
　第４節　百町原地区遺跡……14
　第５節　上南方地区遺跡……15
　第６節　元野地区遺跡……17
　第７節　古江地区遺跡……19
　第８節　中尾・牛牧地区遺跡……21

挿図目次

第１図　吉村遺跡の位置図…… 4
第２図　トレンチ配置図及び第３トレンチ土層図…… 4
第３図　中池遺跡の位置図…… 7
第４図　第３トレンチ土層図及び実測図…… 7
第５図　中萩遺跡の位置図……10
第６図　トレンチ配置図……10
第７図　第５トレンチ土層図及び実測図……11
第８図　出土遺物実測図……12
第９図　百町原地区遺跡位置図……14
第10図　上南方地区遺跡……16
第11図　元野地区遺跡……18
第12図　古江地区遺跡……20
第13図　中尾・牛牧地区遺跡……22

図版目次

図版１　吉村遺跡…… 5
図版２　中池遺跡…… 8
図版３　中萩遺跡……13
図版４　上南方地区遺跡……15
図版５　元野地区遺跡……17
図版６　古江地区遺跡……19
図版７　中尾・牛牧地区遺跡……23

第Ⅰ章　平成３年度調査の概要

平成３年度は、ほ場整備、特殊農地保全、広域農道建設、農道建設、草地開発、農村公園等の事業の中で平成３年度或いは平成４年度工事実施予定区内で分布調査・発掘調査を実施した。発掘調査を実施したのは、下記のとおりである。

遺跡名等	所在地	調査年月日	調査担当
上南方地区遺跡群	延岡市細見町	平成３年５月９日～10日	北郷　泰道
祇園原地区遺跡群	新富町大字新田字曲久保	平成３年５月24日～31日	石川　悦雄
吉村遺跡	高崎町大字江平字吉村	平成３年６月５日～７日	面高　哲郎
大塚遺跡	北郷町大字北河内字大塚	平成３年７月22日～８月２日	面高　哲郎
百町原地区遺跡群	日向市美々津町	平成３年９月２日～４日	北郷　泰道
中池遺跡	高城町大字大井手字小杉	平成３年12月24日～26日	面高　哲郎
中尾牛牧地区遺跡群	高鍋町大字南高鍋	平成４年１月20日～２月26日	北郷　泰道 山本　格
中萩遺跡	北郷町大字北河内字中萩	平成４年１月27日～２月１日	面高　哲郎
元野地区遺跡群	田野町大字元野	平成４年１月30日～２月10日	長友　郁子
古江地区遺跡群	北浦町大字古江	平成４年１月17日～19日	北郷　泰道
長江浦地区遺跡群	えびの市大字東長江浦	平成４年２月10日～28日	面高　哲郎

本年度調査した11か所の中で、吉村遺跡、中萩遺跡、中池遺跡、百町原地区遺跡など８遺跡については第Ⅱ章での調査の概要を報告しているが、その他の遺跡の調査結果は下記のとおりである。

祇園原地区遺跡の発掘調査は、昭和63年度から一ツ瀬パイロット事業の一環である祇園原地区ほ場整備事業予定地の事前調査を実施してきているが、本年度は大字新田字曲久保の古墳間に広がる畑地を試掘した。当該地の基本層序は、上から耕作土、黒色土、アカホヤがそれぞれ20cm前後、褐色粘質土が40～50cmである。調査は、作物や天候の関係で二枚の畑に三つのトレンチを入れたにとどまった。確認した明確な遺構は、幅１ｍ未満で深さ20～50cm程の溝三本である。遺物の出土が皆無であったため、その時期、性格は分からないが、Ｂトレンチの溝は湾曲しており、削平された古墳の周溝の可能性もある。

地下式横穴の可能性が指摘されていた、大原造園内の落ち込みについては、竪坑状の穴の埋め土からビニール等が検出され、樹木の移動に伴う重機の痕跡と判断した。

大塚遺跡は、北眼下に黒荷田川を望む山腹に形成された標高約120ｍの河岸段丘上に立地する。遺跡の一部を沿海南部広域農道が通過することになったので発掘調査を実施した。その結果、アカホヤ層上の２次アカホヤと通称しているアカホヤと黒色の混土で明褐色を呈する層で縄文後期後半の黒色磨研土器、チャート片、中世の東播系のこね鉢等が出土した。遺跡は、中世と推定されるピットが検出されたのみである。

長江浦地区遺跡群の発掘調査は、本年度は平成４年度ほ場整備実施予定の長江浦川左岸の北面する河岸段丘上に立地する役所田遺跡とその周辺を調査した。役所田の字名は、近世の島津藩時代、当地が米の集積場に伴う役所があったことに由来している。段丘上は、現在、水田となっているが、旧地形を復元すると、奥部は緩斜面で、北端部ではほぼ平担となり、また、北方向の小谷が認められる。当地の地層は、開田等の際に影響を受けており、一部地層の乱れも見られるが、部分によっては盛土が厚く地層の遺存状況が良好な部分もある。調査の結果、緩斜面部の２か所で中世～近世の時期の柱穴が検出され、遺物は、土師器片、青磁片が出土した。平担部の１か所では、遺構検出面からの深さが50cm程の竪穴状の遺構等が検出されている。遺物の中で土器は、縄文後期の沈線文土器、磨消縄文土器、貝殻文土器、黒色磨研土器等が多量に出土し、石器は、磨製石斧（２）、石鏃（１）が出土したほか、気泡が入り質は悪いが多量の黒曜石片が多く出土している。

第Ⅱ章　発掘調査の概要

第1節　吉村遺跡

1.　遺跡の位置及び調査に至る経緯

高崎町の町街の東3kmに位置する標高約156mの塚原台地には、前方後円墳（1基）、方墳（1基）、円墳、地下式横穴墓等から成る塚原古墳群が所在する。吉村遺跡は、眼下に木下川を望む塚原台地の北端に立地する。

当地において、町による農村総合整備モデル事業農業集落道整備の一環として池田～小丸線の改良工事を計画があり、地元より計画地内に塚が所在していることが指摘された。そこで町教育委員会で分布調査で行ったところ、円形の盛土が工事予定地内に1基（1号）、1号の南東8mの位置で1～2mの間隔で直線状に並ぶ3基（2～4号）が確認された。規模は、1号が径3m、高さが0.8m、2号が径8m、高さが約1m、3号が径4m、高さが0.3m、4号が径4m、高さが0.6mである。遺物の散布は認められなかったが、周辺遺跡の状況からこの盛土は、地下式横穴墓に伴う可能性があった。

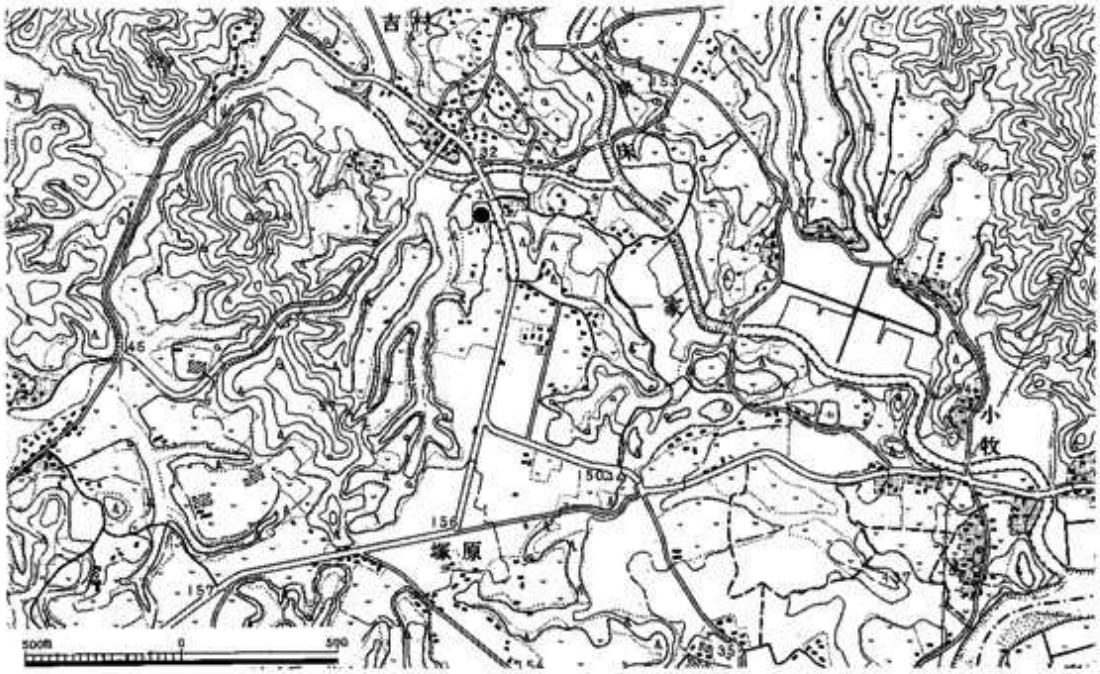
4基の盛土の中で1号盛土が農道改良工事に伴う掘削内に含まれ、径8m盛土の2号については、掘削範囲に隣接していたので、発掘調査を実施してその性格を確認することになった。調査は、平成3年6月5日から7日まで3日間実施した。

2.　調査の方法と概要

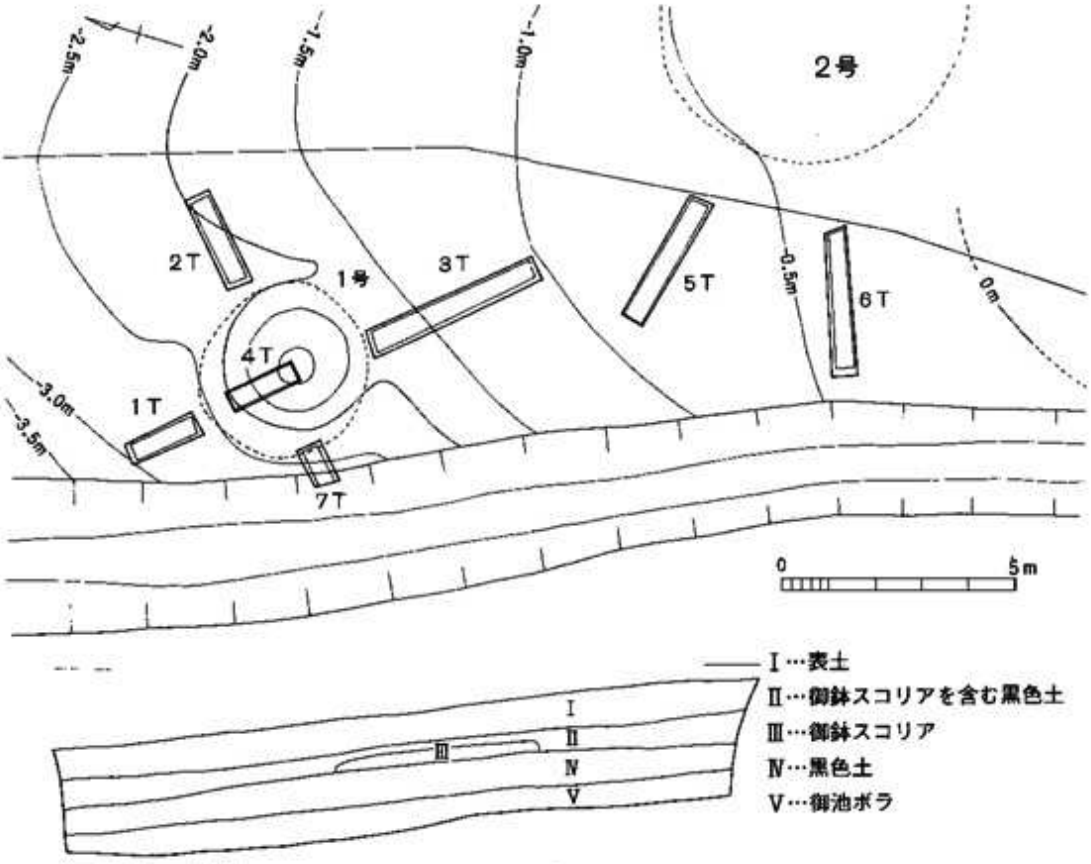
調査は、1号盛土部分を中心として工事予定地内をコンタは50cm、縮尺1/50で測量後、トレンチ法で実施した。当地の基本層序は、第Ⅰ層黒褐色を呈する表土、第Ⅱ層スコリアを含む黒色土、第Ⅲ層御鉢スコリア（高原スコリアと別称される788年の火山降下物）、第Ⅳ層黒色土、第Ⅴ層ボラを含む暗褐色土、第Ⅵ層御池ボラとなっており、第Ⅲ層御鉢スコリアまでは一部後世の攪乱を受けている。

1号の現況は正円形の盛土で、その裾部では僅かではあるが、周溝状の窪みが確認される。トレンチは、裾部に十字になるよう4か所、盛土部分に1か所設定した。調査の結果、盛土裾部で明瞭な周溝は確認出来ず、また、盛土に使用された土は御鉢スコリアであることが確認されたので、この盛土は、古墳時代の地下式横穴墓に伴うものでなく少なくとも奈良時代以降の盛土と判断された。第7トレンチの東端・盛土の裾付近にあたる部分で御池ボラに黒色度が混じる部分があり、掘り込みがある可能性が認められた。遺物は第3トレンチの第Ⅱ層で時期不詳の土器片が数点出土した。

2号盛土の周溝等の確認を目的として第5・6トレンチを設定したが、周溝は確認出来なかった。遺物は、第5トレンチの第Ⅱ層で時期不詳の土器片が数点出土したのみである。



第1図　吉村遺跡の位置図



第2図　トレンチ配置図及び第3トレンチ土層図

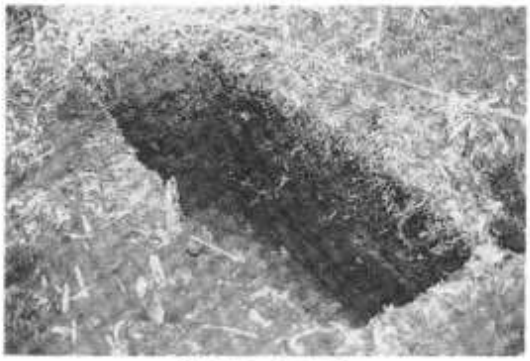
図版1　吉村遺跡

1号盛土(北西より)

1号盛土(北東より)

第4トレンチ

第7トレンチ



第1トレンチ

第3トレンチ

2号盛土(北西より)

第6トレンチ

第２節　中池遺跡

1.　遺跡の位置及び調査に至る経緯

中池遺跡は、高城町の北に位置する牧の原台地の北縁部下の、現在、農業用水用の溜め池である中池内に所在する。遺跡は、昭和59年、霧島南部広域農道建設に伴う分布調査の際発見されたもので、中池の汀線周辺で縄文後期の貝殻文土器片や平安時代のヘラ切りの土師器坏、布痕土器などが多量に採集されていた。また、平成３年11月の分布調査の際は打製石斧等も採集されている。中池遺跡のすぐ南上の台地には永山原遺跡が所在しており、昭和60年度の発掘調査で縄文後期、平安時代及び中世の集落遺跡であることが判明している。

高城町では、中山間事業の一環として中池遺跡と永山原遺跡を含む一帯で農村公園建設を策定中である。工事実施年度は現在未定であるが、11月の分布調査の際、池は溜水中で水位が低かったので平成３年12月24日～26日まで遺跡の性格の把握を目的として発掘調査を実施した。

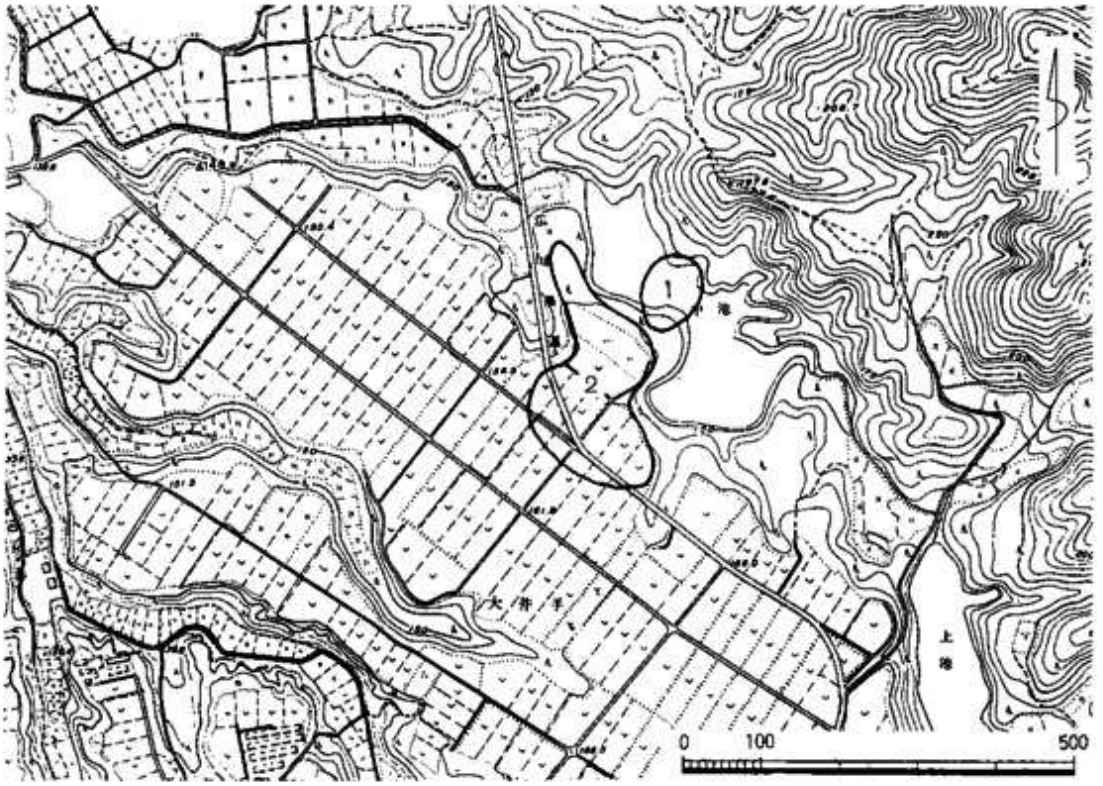
2.　調査の方法と概要

発掘調査は、養魚場の管理小屋周辺で実施し、幅１ｍ、長さ３～５ｍのトレンチは３か所設定した。

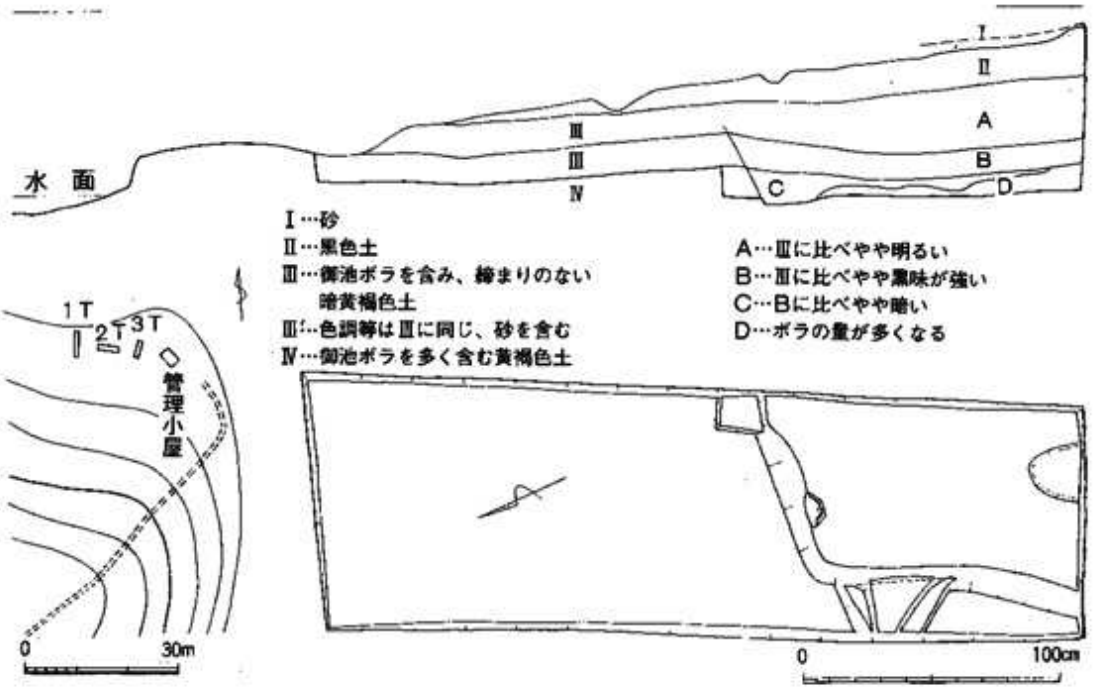
当地の基本層序は、第Ⅰ層砂、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層御池ボラを含み、締まりのない暗黄褐色土、第Ⅳ層御池ボラを多く含む黄褐色土となっているが、部分的には第Ⅰ層が欠如している。トレンチは、池の汀線近くに設定したため、トレンチの深さが水位面に達すると水がしみ出したため、発掘もその面までとした。

各トレンチの概要は次のとおりである。第１トレンチでは、第Ⅱ層から第Ⅲ層で縄文後期及び平安時代に土器片が出土し、第Ⅳ層面で径30cm程で埋土が暗黄褐色土のピットが検出された。その他黒色土の落ち込み部分が２か所確認されたが、その性格は不明である。第２トレンチでも第Ⅲ層で埋土が黒色土で上場幅53cm、深さが36cm程でＶ字状に落ち込み部が南壁で見られた。遺物は、第Ⅱ層から第Ⅲ層で縄文後期及び平安時代に土器片が出土した。第３トレンチでは第Ⅳ層面で方形プラン？の竪穴が検出された。竪穴は第Ⅲ層中で掘られており、埋土は、ボラを含む褐色系の土でレンズ状に堆積している。竪穴内では短径20cmのピット１個が検出された。竪穴内から出土した遺物は、縄文及び平安時代の遺物が出土しているが、ほぼ完形のヘラ切りの土師器坏は床面から５cm程浮いた位置で出土した。竪穴の時期は、掘り込まれた層、埋土及び出土遺物から平安時代の可能性が高い。

今回の調査では、当地に平安時代の遺構の存在する可能性が高いことが指摘しうるが、縄文時代については不明といわざるをえない。



第3図　中池遺跡の位置図（1…中池遺跡、2…永山原遺跡）



第4図　第3トレンチ土層図及び実測図

図版２　中池遺跡

調　査　状　況

トレンチ配置状況

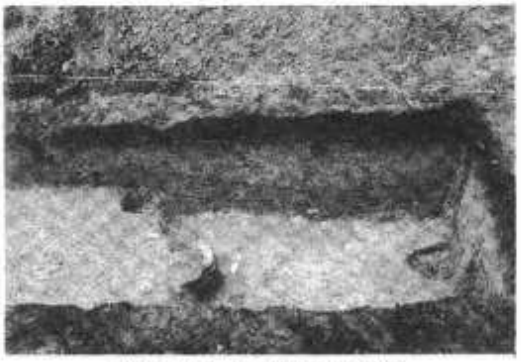
第１トレンチ(南より)

第１トレンチ検出遺構

第２トレンチ

第２トレンチ東壁遺物出土状況

第３トレンチ(北より)



第３トレンチ検出遺構

第3節　中萩遺跡

1.　遺跡の位置及び調査に至る経緯

北郷町では、田野町との町堺・大戸野の山林において畜産振興のため草地開発整備事業区秋切谷地区を計画し、平成3年12月25日から事業に着手していた。事業地は、南面する傾斜地で標高は530～410mである。当地では、平成元年度の遺跡詳細分布調査でも遺跡は確認されていなかったが、町教育委員会と合同で分布調査をしたところ、この中に1500㎡ほどの緩斜面が2か所、その間に湧水点が1か所あり、遺跡がある可能性があった。そのため、遺跡の確認を目的とした発掘調査を平成4月1月27日から2月1日まで実施した。

2.　調査の方法と概要

調査は、造成工事が実施される畜舎及び管理棟建設予定地（A地区）、遺跡の可能性のあった2か所（B地区、C地区）の計3か所を調査対象地としてトレンチ法で実施した。トレンチは、A地区に3か所、B地区に4か所、C地区に1か所設定した。

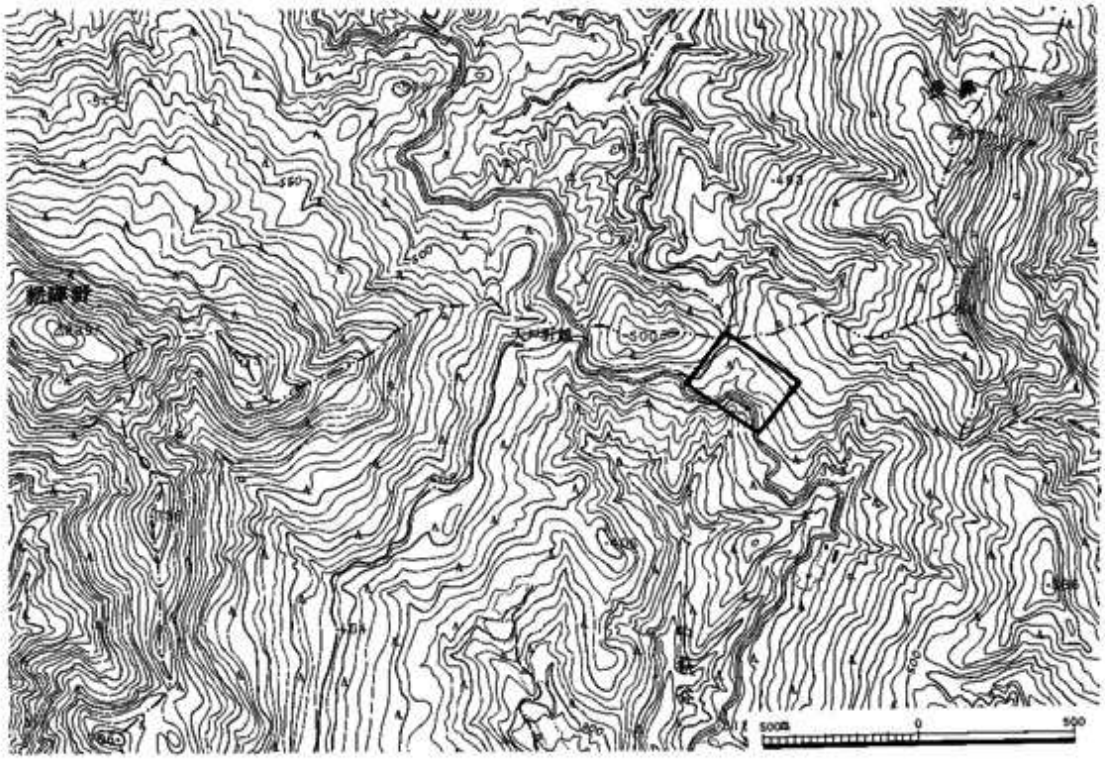
当地の基本層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層白ボラ（文明ボラ）、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層黄褐色土、第Ⅵ層アカホヤ、第Ⅶ層カシワバン（青灰色火山灰を含む）、第Ⅷ層黒褐色土、第Ⅸ層黄褐色土となっているが、傾斜地、緩斜面、小谷部で層の遺存状況は異なっている。たとえば、小谷部で第Ⅰ層から第Ⅳ層まで遺存し、ただしその下層には、アカホヤはなく礫を含む褐色系の土となっており、また、傾斜地、緩斜面、尾根部分では、第Ⅱ層下は第Ⅴ層黄褐色土、第Ⅵ層アカホヤとなっている。地層の遺存状況からアカホヤ降下後、浸蝕が激しい時期があったものと推定される。

調査の結果、遺跡の可能性のあったB地区については弥生後期、縄文早期の遺跡が、C地区については縄文早期の遺跡が所在し、A地区には遺跡が所在しないことが確認された。

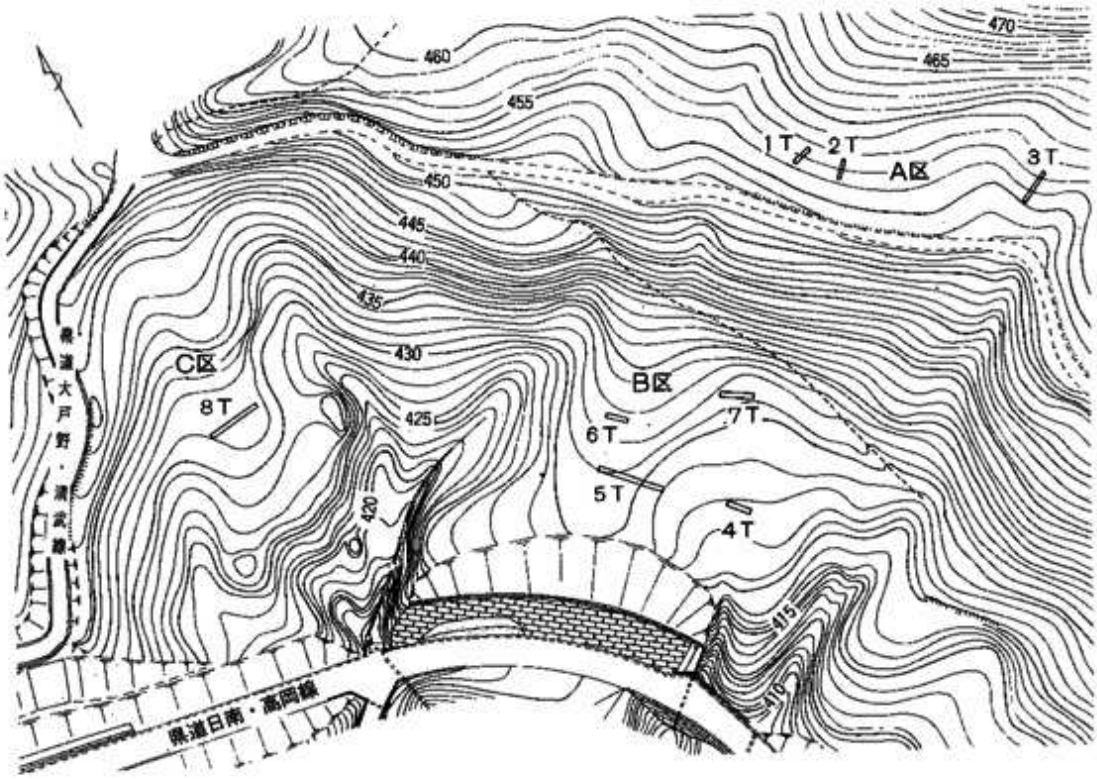
B地区の緩斜面部及び尾根部分の地層は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層暗黄褐色土、第Ⅳ層黄褐色土、第Ⅴ層アカホヤ、第Ⅵ層カシワバン、第Ⅶ層黒褐色土、第Ⅷ層黄褐色土となっている。遺構は、第Ⅶ層で集石遺構2基が検出され、遺物は、チャート製の石匙、石鏃が各1点、無文土器の小片が出土した。この他、第Ⅳ層で弥生土器小片1点、風倒木部分の第Ⅲ層から第Ⅳ層の層で弥生土器の壺1固体分が出土している。

C地区の地層は、基本的にB地区と同じで第Ⅰ層表土、第Ⅱ層暗黄褐色土、第Ⅲ層部分的に黄色のボラ（御池ボラ？）を含む暗黄褐色土、第Ⅳ層アカホヤ、第Ⅴ層カシワバン、第Ⅵ層黒褐色土で下部には礫が含まれている。第Ⅵ層の礫は、明瞭に焼けているとは見られないので集石遺構等に伴う礫とは判断出来なかったが、同層で桙ノ原式土器片が1点、黒曜石片、チャート片が出土している。

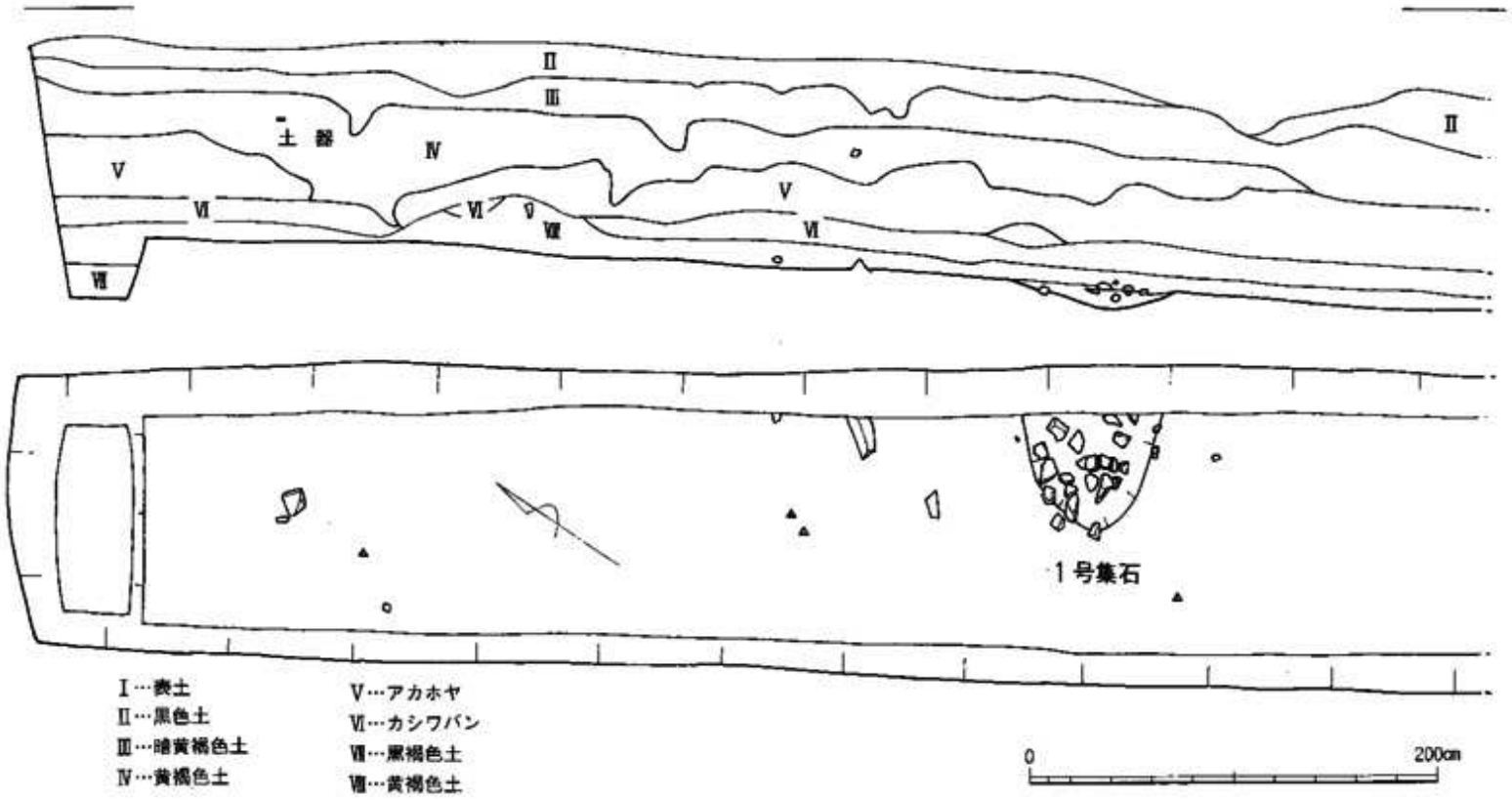
なお、遺跡が所在するB地区・C地区については、所在位置が工事区内では最も低位置で盛土予定地であったので、現状で保存されることになった。



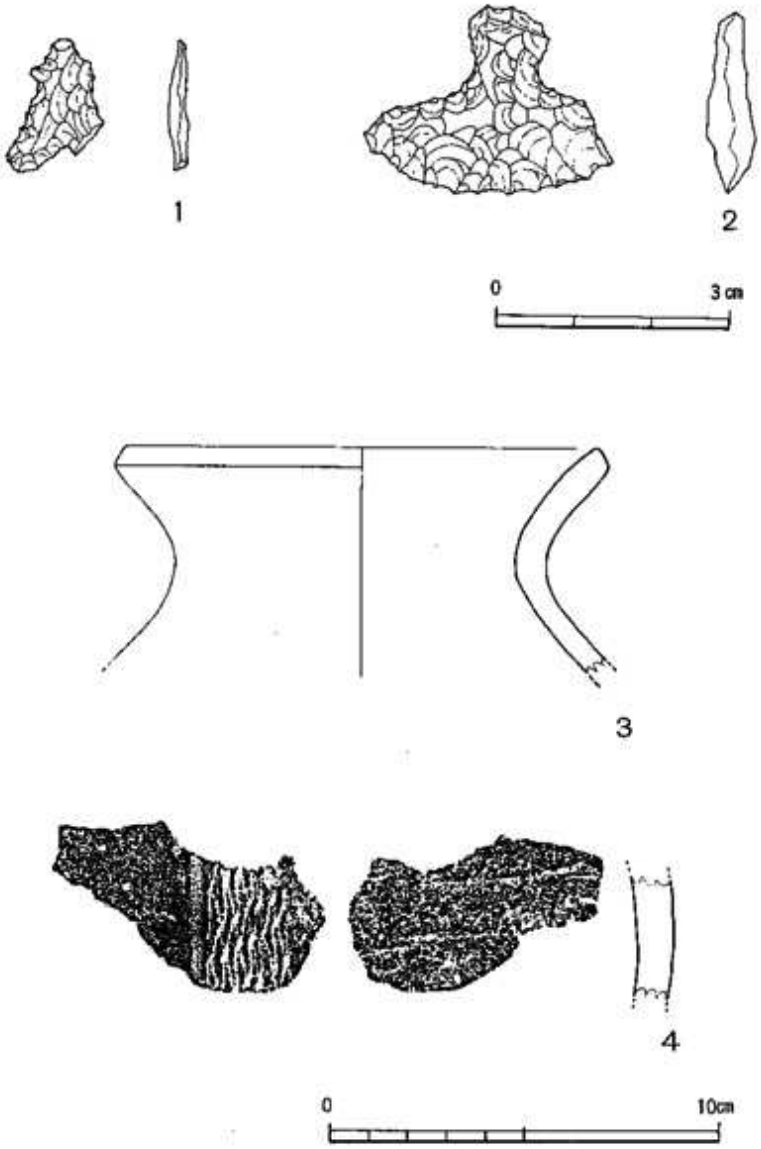
第5図　中萩遺跡の位置図



第6図　トレンチ配置図



第7図　第5トレンチ土層図及び実測図



1・2　B区第5トレンチ第Ⅶ層出土
3　B区第5トレンチ第Ⅳ層出土
4　C区第8トレンチ第Ⅶ層出土

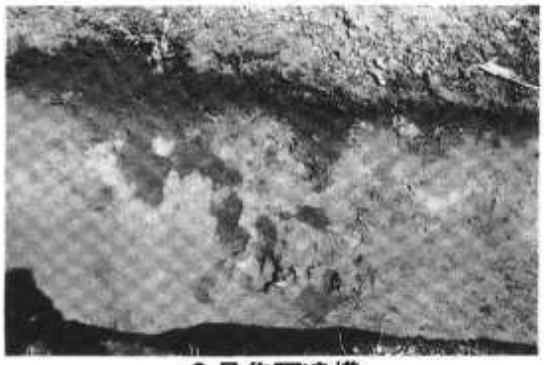
第8図　出土遺物実測図

図版３　中萩遺跡

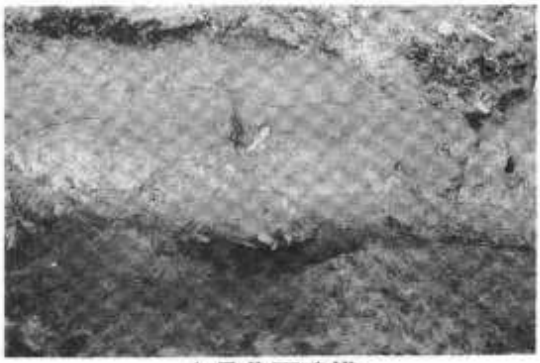
B区近景(東より)

第５トレンチ

１号集石遺構



２号集石遺構



１号集石遺構

弥生土器出土状況

C区近景(北より)

第８トレンチ

第4節　百町原地区遺跡

1.　遺跡の位置

百町原地区は、日向市街地から南約10kmの美々津町に所在する。日向灘を東に望む標高30～40mの台地上を中心に遺跡は分布している。

2.　調査に至る経緯

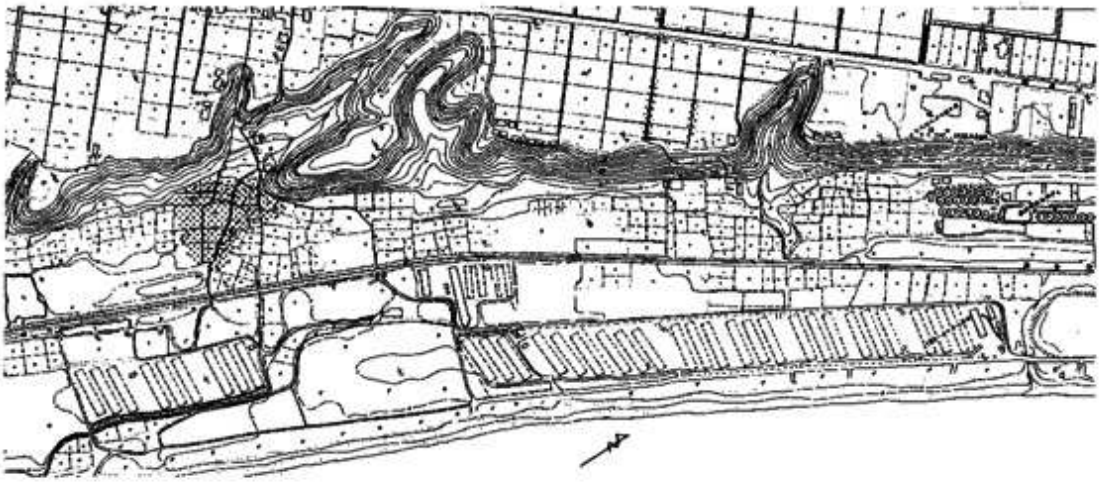
昭和62・63年度には、遺跡の広がりの中で国道10号線から西の地区で、ほ場整備に伴う発掘調査が実施されている。その結果、縄文時代早期及び弥生時代の遺構等が検出されている。

平成3年度のほ場整備対象予定区は、国道10号線から東の地区で、分布調査の結果若干の遺物散布が認められたため、試掘調査を実施した。

3.　調査の概要

対象地区は台地の上と、台地下の海岸に面した二ヶ所である。台地上は、遺跡の立地に有望な景観を有するが、ほ場整備の面的工事は、全体的に土地の切り盛りは計画されていないことから、道路敷部分が本調査の対象とされた。そのため、計画された道路敷に添って、7箇所のトレンチを設定した。結果は、アカホヤ層の上面までの削平が全てにみられ、また遺物の確認もなく、道路敷に限定した時、本調査の必要はないと判断された。

一方、台地下は対象地の広さもあり、重機を使用して現水田の一筆ごとに長めのトレンチを設定した。その結果、耕作土の下は全て礫層で占められており、礫層の深さは4m以上に及ぶものであった。工事対象区は、上部台地からの開析谷を中心に広がる場所で、絶えず台地の基盤である礫が谷よって供給され、分厚い礫層を形成したものと考えられ、対象区内での遺構等の存在の可能性はないと判断した。



第9図　百町原地区遺跡位置図（網点・試掘地点）
（S＝1／10,000）

第５節　上南方地区遺跡

1.　遺跡の位置

上南方地区は、延岡市街地から西に約８kmの細見町に所在し、標高約50m の南に緩やかに傾斜した台地上に立地する。

2.　調査に至る経緯

上南方地区では、平成元年度から県営ほ場整備に伴い、市教育委員会によって発掘調査が実施されている。その内中尾原遺跡では、これまで旧石器時代及び縄文時代早期の包含層、縄文時代晩期の遺物、そして弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が約50軒検出され、大規模な集落の一角が明らかになりつつある。

今回、試掘調査を実施したのは、当初の遺跡範囲確認のなかで、遺構の残存及び広がりの可能性が低いとされてきた場所であった。しかし、隣接の調査区の状況から、遺構の広がりの可能性が出てきたため、整備事業との調整資料を得ることを目的として試掘調査を実施した。

その結果、対象地全体に削平を受けているものの、一部包含層とアカホヤ層の残存を認めることが出来、協議の結果、本年度市教育委員会において本調査を実施している。

3.　調査の概要

７箇所にトレンチを設定した。北側トレンチではアカホヤ層までの削平がみられ、包含層の確認も出来なかったが、耕作土に土器片の混入がみられ、一部の遺構等の残存の可能性を示していた。

それに対し、南側に緩やかに下るにしたがって、アカホヤ層の残存及び一部包含層の残存が認められ、試掘トレンチは直接遺構をとらえることは出来なかったが、遺構存在の可能性は高いと判断された。

出土遺物は、縄文時代後期～晩期の土器片、及び弥生土器である。

図版４　上南方地区遺跡

トレンチ遺物出土状態

縄文土器出土状況

1…山口遺跡　　3…試掘地

2…中尾原遺跡

元年度分　　2年度分

試掘地

第10図　上南方地区遺跡

第6節　元野地区遺跡

1.　遺跡の位置

元野地区は、田野町の市街地から南西約2kmの、標高約180mを最高位とする台地上にある。同地では、昭和54年に高野原地下式横穴墓の発見があり、また小河川を隔てた南の台地には縄文時代後期の遺跡として知られる黒草遺跡が所在し、平成元年度の遺跡詳細分布調査の結果、高野原遺跡、本野遺跡として広範囲な遺物散布が確認されている地域である。

2.　調査に至る経緯

同地区において、平成4年度から県営ほ場整備の開始が計画されており、本年度は約3haを対象に試掘調査を実施することになった。

3.　調査の概要

調査対象地は、過去に地下式横穴墓が検出された台地の最高位部分ではなく、南の小河川に面した台地の縁辺部分で、遺跡詳細分布調査での本野遺跡に当たる部分である。

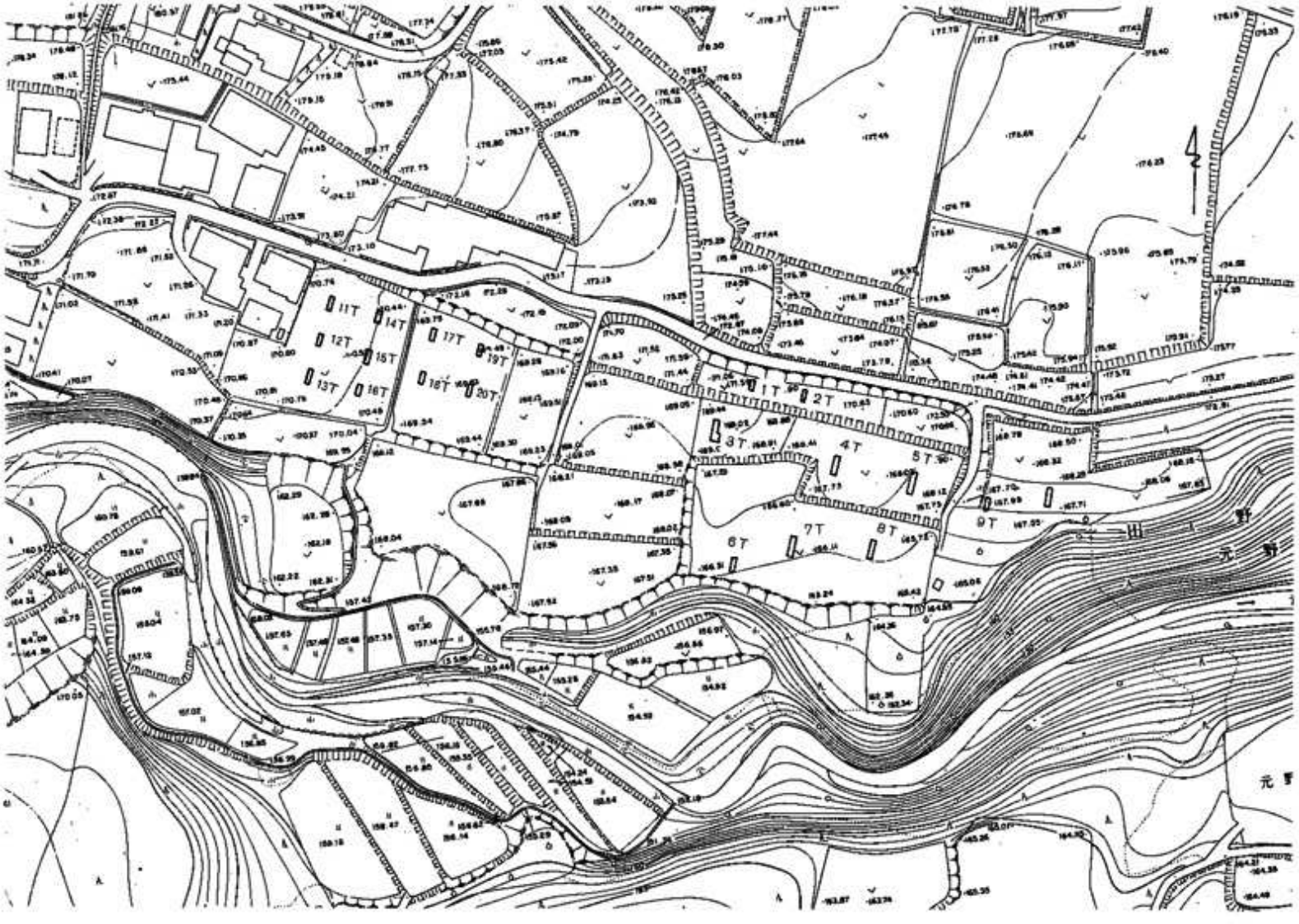
対象地は、南向きの比較的急な傾斜地で、基盤は段丘礫層となっている。過去、大きく2～3段に造成されているが、アカ木や層下まで削平が及んでいるのは稀で、全体としては旧地形を踏襲した造成が行なわれていたと見ることが出来る。

検出された遺物は、縄文時代後期土器、弥生土器、土師器などである。また、17トレンチでは、弥生時代竪穴住居跡と見られる一角が検出されている。最下段での遺物の出土量はやや少ないが、広い広がりを持った遺跡の存在が想定される。

図版5　元野地区遺跡

第10トレンチ遺物出土状態

第17トレンチ遺物出土状態



第11図　元野地区トレンチ設定図 (S=1/2,000)

第7節　古江地区遺跡

1.　遺跡の位置

古江地区は、北浦町の中心にあたり、『全国遺跡地図』（昭和52年、文化庁）では、西側丘陵上に遺物散布地が記載されている。

2.　調査に至る経緯

古江地区においては、平成元年度から団体営のほ場整備が実施されているが、事業の進行に伴い、遺跡立地の可能性の高い部分に工事がおよび始めたため、分布調査を実施した結果、土器片の散布を認めることができた。

協議の結果、平成４年度が事業の最終年度となるが、対象地がことに遺跡の可能性が高いので、その範囲、及び性格を把握するため、試掘調査を実施することにした。

3.　調査の概要

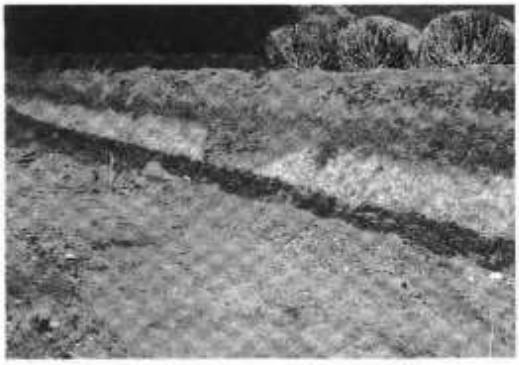
すでに、平成３年度事業区の工事法面に竪穴住居跡の断面が３箇所、および柱穴とみられる掘り込みが数箇所確認されている。

休耕地を中心に10箇所のトレンチを設定した。西側山際の５・９トレンチは、過去の畑地造成時に削平を受けるなどし、包含層は認められず、小量の遺物が出土したのみである。また、10トレンチは、耕作土の下が礫層となり遺物の出土は確認されていない。10トレンチの状況は、地元で言われる再三の山崩れの影響を物語るもので、南東方向に礫層が広がり、試掘調査対象地の東半分は、遺跡としての立地にそぐわない場所であったと判断される。

その他のトレンチでは、ほぼ全体的に良好な包含層とアカホヤ層の残存を認めることが出来た。３トレンチでは縄文～弥生土器、６トレンチではヘラ切り底の坏、８トレンチでは須恵器坏蓋などを顕著な遺物として確認している。

従って、既に断面をみせる竪穴住居跡を含み、ほぼ南北に広範囲、かつ時期幅のある遺跡の立地が推定される。

図版６　古江地区遺跡



工事法面の遺構断面

第６トレンチ掘り込み検出の状態

第12図　古江地区遺跡トレンチ設定図
(S=1/2,000)

▲遺構断面検出地点

第8節　中尾・牛牧地区遺跡

1.　遺跡の位置

中尾・牛牧地区は、高鍋町の市街地から西に約2kmにある標高約80mの台地で、昭和63年度の遺跡詳細分布調査において、北牛牧、下耳切、牛牧原など縄文時代から中世の各時期に及ぶ遺物散布地が確認されている。

2.　調査に至る経緯

県営ほ場整備が、同地区において計画されるに伴い、遺跡の範囲、遺構等の残存状態を確認し、整備事業との調整資料とすることとし、本年度は平成4年度予定地について試掘調査を実施し、以後事業年度に先立ち試掘調査を実施することにしている。

3.　調査の概要

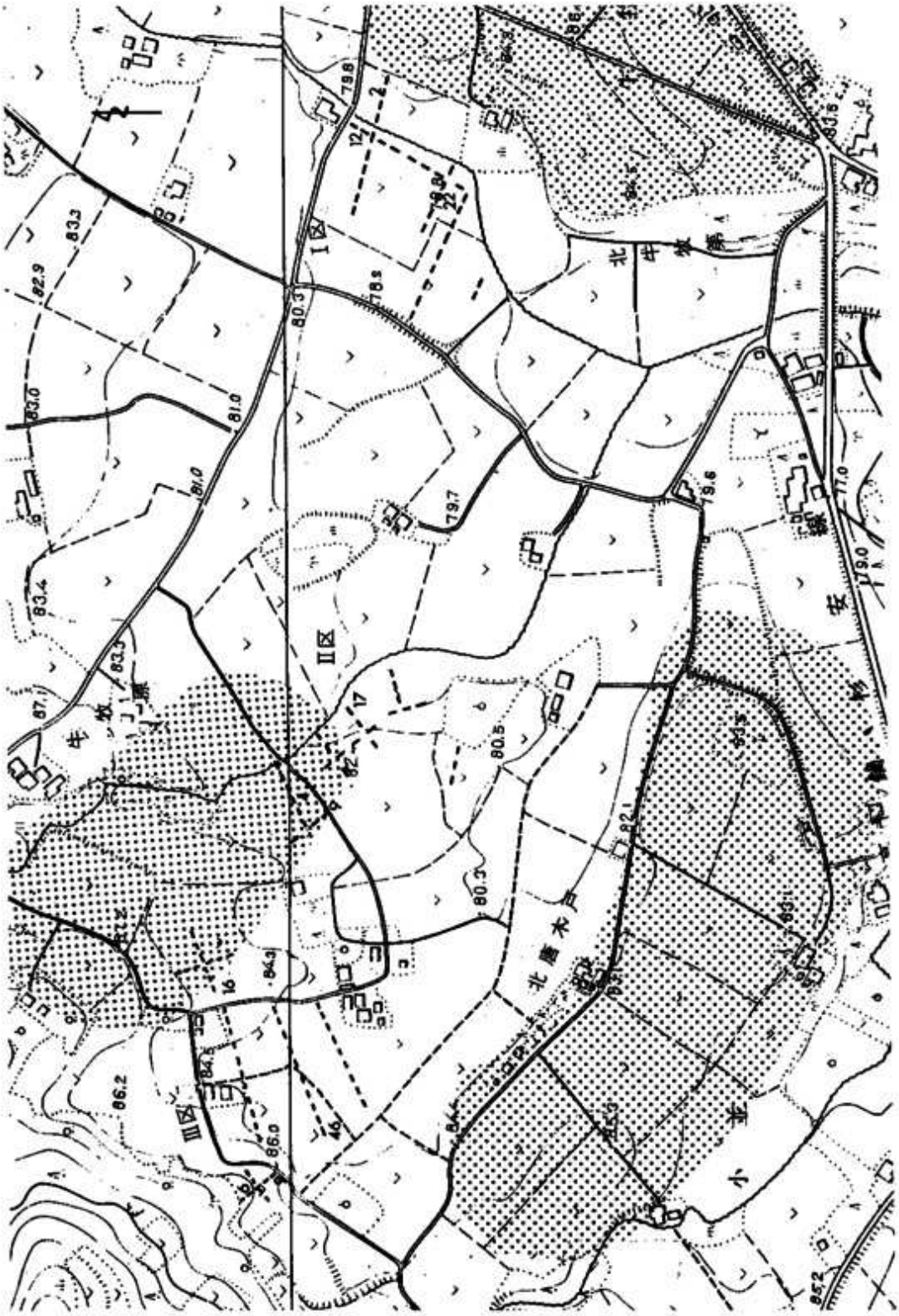
調査対象地は、作物の関係上3地区に分かれ、いずれもこれまで遺物散布の確認されている地域の周辺の広がりを確認する形になった。

最も東の調査地(Ⅰ区)は、詳細分布調査の結果、北牛牧第2遺跡とされた地域の西の広がりにあたり、中央の調査地(Ⅱ区)は、牛牧原遺跡の東の広がりにあたり、西の調査地(Ⅲ区)は、北唐木戸遺跡の北西の広がりにあたる地区である。

Ⅰ区では、北牛牧第2遺跡の散布地の西に小さな谷の存在が確認され、谷の西の微高地に当たる部分が主要な対象となったが、アカホヤ層の残存自体悪く、トレンチにおいてチャートの剥片が確認されたに留まる。

Ⅱ区では、耕作土表面での遺物散布は見られたものの、予想以上に削平が著しく、所によっては、アカホヤ層下の褐色土層まで削平されていることが判明した。

Ⅲ区でも他の調査地と同様、削平が予想以上に行なわれていたが、山裾のトレンチでは、アカホヤ層下の褐色土層までが削平されていたが、同層から石器剥片が検出され、縄文時代早代早期から旧石器時代にいたる包含層の存在が確認された。



第13図　中尾・牛牧地区トレンチ設定図 (S=100/5,000)

Ⅰ区 第12トレンチ

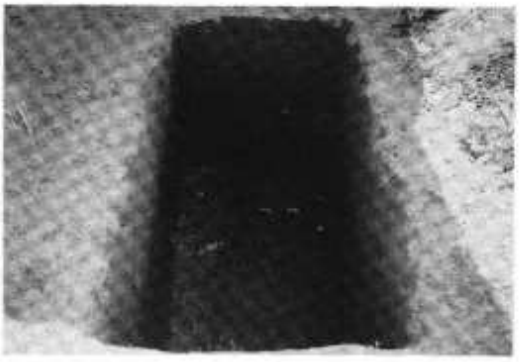
Ⅰ区 第22トレンチ

Ⅱ区 第4トレンチ

Ⅱ区 第9トレンチ

Ⅱ区 第17トレンチ

Ⅲ区 第6トレンチ



Ⅲ区 第9トレンチ

Ⅲ区 第16トレンチ

図版7　中尾・牛牧地区遺跡

平成３年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書

平成４年３月

編集　宮崎県教育庁文化課
発行　宮崎県教育委員会